

質問に対するコメント

お記本文から離れ、これまで私が受けた質問に対してコメントさせていたいただきます。

一 オウムが事件を起した事について、社会の側に何らかの要因があつたと思ふか。

オウム関係者が事件を起した動機の範囲に限って私見を述べさせていただきます。だまますと本質的に社会の側には今の要因はなかつたと思ふます。当の動機が社会の状況などとは関連がなく、オウムの教義上の宗教的問題だつたからです。

オウムの関係者は幻覚的経験によつて、教義の世界観を現実として知覚しており、教義上の救済と認識して事件を起しました。教義では一般社会の人々は悪業をなしてゐるために、来世は苦界に転生するとされてゐました。その人々を「ポア」——人々の生命を絶ち、より幸福の世界に転生させること——によつて救済する事柄の動機だつたのです（第三章第一節参照）。この動機に、社会における現実的状況との関連は見出されません。

二 違法行為を命じらる麻原の指示に従うにあたり、信徒には葛藤があつたか。

すべての信徒ではないかも知れませんが、ほとんどの信徒が葛藤なく指示に従つたのではないかと。それだけ完全に信徒は世界観——価値観や規範意識を含む——が教義に沿うものに賛同してゐるように見受けられました。例として第一審時に私は地下鉄サリン事件の共犯者の公判に証人として出庭した際、弁護側と次の問答をいたしました。

問 リアルなテレビとか映像で被害に遭つてゐる人の状況が映し出されるときは、何か感傷的にかつたのですか。

答 オウムの真理教の縁ができて、早く救済されたほしいなというようには余り考へていませんが、普通の人が考へるようなことはまだ余り考へていません。自分としてはオウム真理教の

問 ヴァジュラヤーナの実践、あるいは救済という考へについて、

答 取りつかれてゐたという事か、そういうふうな考へが正しいとは思つたという事です。

私が供述したのは、地下鉄にサリンを発散させた後の集合場所下

事件の報道をテレビで視聴したときの心境は、
共犯者の陳述——その報道の視聴中に、私が共犯者に話した内容——
によっても明らかになります。
このように、誠に非道なことでした。私は葛藤なく麻原の指示
に従っていました。しかし第一審時には、これを供述するの抵抗
があつたので、葛藤があつた旨の事実とは異なる供述をしていま
した。たとえば、地下鉄に乗車して、女子中学生がサリンの被害
に遭うことについて、葛藤があつたことも受け取れる供述をしていま
した。しかし実際は取り調べ中に、そのようにしたこと（女子中学
生がおわいする）から車両を換えたこと（という）は思つていませ
ん。と述べ、警察官と驚かせてしまつたこと（があつた）です。お
いは、お前、随分は、きりものを言うな。と。（なお、この事実に関
しては、私は第二審で供述しました。）
以上のように、犯行当時の心理について、私は相矛盾する供述をし
てきました。その状況は、全員ではないか、私もいけません。多くの
元信徒被告人は共通するようです。やはり言いくいことなので、
元信徒被告人は実際より、葛藤があつた旨を供述する傾向が見られ
ます。ですから裁判では、信徒の犯行当時の心理状態は正しく再現
されませんでした。そのために、関係者が元信徒被告人の心理も検
討するにあたり、支障を来たして、いるように思われます。

三、麻原は詐病か。

私は個人的には、詐病ではないと思つています。
平成八年一月七日、私は証人として、麻原の公判に出廷しまし
た。その日初めて麻原の顔を見たとき、私は驚愕したのです。その
奇妙に弛緩した笑い顔に、その瞬間、麻原が精神に異常を来したこ
とも私は悟りました。見た者の背筋を寒からしめるあの表情は、い
かなる役者も演じ得ないでしょう。
その体験があまりに強烈であるがゆえに、麻原が精神を患つてい
ることも私は疑いません。ただ私は、精神病を診断できる技能は
持ち合わせておりません。ましてや麻原の訴訟能力の有無を論じ
られる立場ではありません。

四、オウムに入信する契機と、宗教的経験について、現実とし
て感したと述べているが、そのように、宗教的経験は、誰もがそのよう
に感したのか。

感するようです。その経験は、突然の宗教的回心といひ、人が
葛藤状態にあるとき、などに起ることをされていきます（前出ジエムス）
突然の宗教的回心においては、幻覚的な宗教的経験が自然発生的に
起る。その経験者は急激に宗教的観念を受容して思考・行動体系が

一変します。

私は一九八八年二月頃から麻原の著書を読み始めました。同年三月八日の夜中に突然、身の上の宗教的経験が起きました。宗教的経験が誘起されるオウムの方法を試み、その起したのにもわらずに、下す。その経験は私にこつて、オウムの教義の世界の現出として認識されました。今のために、私はオウムに入信したのです。

突然の宗教的回心に因りて、研究者は次のように述べています。

すべての回心者は疑いの余地なく、無信仰の状態から信仰深い状態になった。回心者は神学的体系や社会的システムを無批判に受容する。自身の宗教的経験を検討し、疑う動機を奪われる。過度に、非理性的に強い信念を抱く。(John P. Killdahl, 1965. The Personalities of Sudden Religious Converts. Pastoral Psychology, September, 37.)

回心は超越体験が起き、極めて非常に逸脱したビリーフ・システムが受容される特徴がある場合、現象論的には、明らかな精神病的に似ているように見える。短期間の反応性患者が評価しなければならぬ。最終的に心理学患者がより建設的な行動や安定した社会的行動に至ったか、あるいは奇妙な破壊的な適応に至ったかの範囲までである。

(Marc Galanter, 1996. Cults and Charismatic Group Psychology. In Religion and the Clinical Practice of Psychology. American Psychological Association.)

これは次のような趣旨です。回心者は幻覚的経験を、常識から非常に逸脱したビリーフ・システム(思考・意思決定の)への受容し、その教義に基づいて思考・意思決定をするようになる。場合がある。また、逸脱したビリーフ・システムが共有される集団の思考・行動様式に適応し、以前の生活を破壊するようになる。奇妙な思考・行動もするに至る場合がある。

精神科医が突然の宗教的回心によって、ファンタジスタの宗教的信条を受容する。常識に反する教義でも、その字義どおりに信じるようになる。ファンタジスタも、研究者は論じています。精神科医は回心を契機に、ファンタジスタの信条が共有される集団に加わり、その集団の影響によって、精神科医としての規範意識や行動が変容したと報告されています。

クリスチャン・サイカイアトリは、福音主義のクリスチャンである精神科医の全国的な運動の方向は、クリスチャン・信者に影響を与えている。この運動の方向は、クリスチャン・

メデイカル・アンド・デンタル・ソサエティが信奉する信条に表れてゐる。最近、この団体は会員に七五〇〇人の健康衛生専門家を教え、そのうち二六〇人は精神科の研修訓練中の精神科医の医者である。志願者は次のことと認められる誓言に署名し、これを「業における聖霊の存在と力」、「聖書の究極的權威」、「心の業における祝福と救済されなかつた者に対する永遠の罰」に討する永遠の祝福と救済されなかつた者に対する永遠の罰」と調査して分かつたのは、身上調査と習慣に関する変教から、応答者は精神科医と全般的に類似してゐるが、大衆より全般的に強い宗教的志向であること（ギヤランタ、ラソソ、ベンストリン、一九九一）。「この後者の違いが考慮されるべきなのは、これに匹敵する一たふんより大きい精神科医一般と大衆全体との間の信念における相違の観点からである。精神科医の五六％が不可知論者か無神論者であること知られてゐる（アメリカン・サイカイアトリック、一九七五）のに対して、一般大衆の五％のみが神や崇高な力を信じてゐる（レリジョン・イン・アメリカン、一九八五）。精神科医において宗教的要素を帯柄に持つる関心が一般に欠除してゐること（ラソソ、パテイソン、ブラザー、オムラン、カプラン、一九八九）が行つた主要精神医学誌の調査でもまた明らかであり、この調査によつて出版された論文の三％しか宗教に関する定量化された変教と含まないことが明らかになつた。この割合は、宗教的信念がいはば広がつてゐるかも、また精神病理とサイコセラピューティックリハビリテーションの両方に関連する心的問題に宗教的信念が影響しうる程度を考慮することになり小さい。精神科医の信念とこの患者の信念との相違は、クワイルとシーハン（一九八九）も最近の研究において強調してゐる。この研究では、入院した精神病患者の集団の九五％が神を信じて、それに匹敵する大きき割合の患者が神に関連する宗教的信念を信奉することに分かつた。

しかし、クリスチャン・サイカイアトリの医者が精神科の業務における処置に組み入れる宗教的信念は、患者の信念に対する気遣いの段階も超える。このような段階を越えるにあり、開業医は公認の専門トレーニングで学んだ治療法の規範から離れなければならぬ。この変容は、この述べた宗教的影響のモデルを頼りに理解できらるかも、いへない。我々の研究によつて、会員の強度の宗教的経験が情緒的苦悩の除去をもたすこと、この分かつた応答者の九五％が「係わらる原因として最初に働いた。実に、応答者の九五％が二度生まれの経験をしたこと述べた。典型的に、このような出来事の後、苦悩や症状が減少した。この経験は我々の応答者も報告した。このとき、この経験は、この標準集団は、行動も変化させる認知的な枠組も与えられた。

える。我々の応答者は、強固に保持される一群の信条を信奉するようになつた。彼が、この信条は聖書に根差し、二度生まれのクリスチャンが奨励するものだ。集団で共有されるこの信条によつて、彼らは新しい行動基準を受け入れることが是認された。この回心者は最終的に、凝集力の強い集団に携わらうようになった。この集団は彼らに、運動組織との係わり合いも維持させ、また集団において一致して、規範を受け入れさせた。我々の応答者について、凝集力が非常に強く、前述の力リスマ的・カルト的若者の運動組織に我々が見出した結果に匹敵する。この凝集力の測定によつて明らかになった。この凝集力と説明するのは、信念の転換の原動力と、その転換に続く行動と深く形成・強化する凝集力の強い集団における帰属の原動力である。(前出の「ササト」)

- *1 二度生まれとは、突然の宗教的回心。
- *2 フアンタメンタリストとは、不合理なことも、字義どおりに經典と真実と信じる信仰形態を持つ人。
- *3 準拠集団とは、人が自分と関係付け、その成員の態度をとらうとする集団。
- *4 凝集力とは、成員と集団に携わらせ続ける影響力全体。